ステレオタイプ抑制における反ステレオタイプと 非優位ステレオタイプの役割^{1, 2, 3}

山本 真菜 大妻女子大学 岡 隆 日本大学

The role of counter-stereotypes and non-dominant stereotypes in suppressing stereotypes

Mana Yamamoto (Otsuma Women's University) and Takashi Oka (Nihon University)

Suppressing stereotypic thoughts leads to paradoxical effects (i.e. suppressing a stereotype facilitates the use of the stereotype itself). Recent research on paradoxical effects in stereotype suppression has demonstrated that replacement thoughts decrease its paradoxical effects. This study examined the effectiveness of female counter-stereotypes, major non-dominant female stereotypes, and minor non-dominant female stereotypes as replacement thoughts in suppressing dominant female stereotypes. In a lexical decision task, the participants were primed with either female counter-stereotypes, major non-dominant female stereotypes, minor non-dominant female stereotypes, or non-human objects, and thus they were likely to use those that were activated as replacement thoughts. Next, they were given a sentence-stem completion task that served as a manipulation of female stereotype suppression. Finally, they were given another lexical decision task and the response latencies of the stereotypic vs. non-stereotypic words were recorded. The results indicated that regardless of major or minor non-dominant female stereotypes as replacement thoughts decreased the paradoxical effects of suppressing dominant female stereotypes. We discussed the way of activation of replacement thoughts and the role of non-dominant stereotypes as replacement thoughts in suppressing dominant stereotypes.

Key words: counter-stereotypes, non-dominant stereotypes, paradoxical effects, replacement thoughts, stereotype suppression.

The Japanese Journal of Psychology

2018, Vol. 89, No. 1, pp. 12-21

J-STAGE Advanced published date: February 20, 2018, doi.org/10.4992/jjpsy.89.16020

人は望まない思考を追いつめようと努力することがある。例えば、不愉快な思考、その場にふさわしくない思考、望ましくない行動に関わる思考をしないように

することがある。このように、ある特定の思考をしないように努力することを思考抑制という。

努力して行う思考抑制には弊害が指摘されている。抑制を行うと、抑制を行わなかった場合よりもかえって思考上に抑制対象が浮かんでしまうという逆説的効果が生じるのである⁴。例えば、Wegner, Schneider, Carter, & White (1987) は、「白くま」を考えないように努力するように教示される抑制ピリオドを行い、そ

Correspondence concerning this article should be sent to: Mana Yamamoto, Major in Social and Clinical Psychology, Department of Human Relations, Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University, Karakida, Tama 206-8540, Japan. (E-mail: mana.yamamoto@otsuma.ac.jp)

¹ 本研究は、第1著者が平成27年度に日本大学大学院文学研究科に提出した博士論文の一部を加筆・修正したものである。

² 本研究結果の一部は、日本社会心理学会第56回大会(2015)とThe 17th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology(2016)で発表された。

³ 本研究は、第2著者が受給した日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C), 課題番号24530794, 研究代表者:岡隆)の助成を受けた。

⁴ 思考抑制による逆説的効果は、抑制中か抑制後かによって分けて考えられる場合がある。抑制中に抑制対象やそれに関連する思考が侵入することは「即時的増強効果」と呼ばれ、抑制を止めた後に、抑制を行っていない場合よりも抑制対象に関する思考が増える現象は「リバウンド効果」と呼ばれている。本研究で扱う現象は、厳密にいうとリバウンド効果に当たるが、より包括的な言葉である逆説的効果を用いることにする。

の後、自由に何でも考えてよい表出ピリオドを行った参加者では、最初に表出ピリオドを行い、その後、抑制ピリオドを行った参加者に比べ、表出ピリオドで「白くま」に関する思考が浮かんだ数が多いことを示した。逆説的效果はさまざまな抑制対象で生じることが示されている。例えば、緑のウサギ (Clark, Ball, & Pape, 1991), 白ねずみ (木村, 2005), ストーリー (木村, 2004a), 個人的な過去のネガティブな出来事 (木村, 2004b), 火災のフィルム (Davies & Clark, 1998), 個人的に知っている人物の特性 (Newman, Duff, Hedberg, & Blistein, 1996), ムード (Wegner, 1994b), 急性ストレス患者による事故の記憶 (Harvey & Bryant, 1998) などである。

本研究では、ステレオタイプを抑制した場合の逆説的效果に焦点を当てる (Macrae, Bodenhausen, Milne, & Jetten, 1994; レビューとして, Monteith, Sherman, & Devine, 1998)。例えば, Macrae et al. (1994) では、スキンヘッドの人物の一日を記述するとき、ステレオタイプの的な記述をしないように努力するよう、ステレオタイプ抑制の教示を与えられた参加者では、そのような教示を与えられなかった参加者に比べ、その後、スキンヘッドの人物に対してよりステレオタイプの的な判断を行うという逆説的效果が示された。本研究では、この逆説的效果を低減する方略について検討することを目的とする。

逆説的效果のメカニズム

思考抑制による逆説的效果が生じるメカニズムを説明するために、さまざまなモデルが提案されている。心的疲労による説明 (Gordijn, Hindriks, Koomen, Dijksterhuis, & Van Knippenberg, 2004; Muraven, Tice, & Baumeister, 1998), 動機づけによる説明 (Förster & Liberman, 2001; Liberman & Förster, 2000), 認知過程による説明 (Wegner, 1994a; Wegner & Erber, 1992) などである。本研究で用いる理論的枠組みは、これらのうち認知過程による説明に基づいている。

認知過程による説明は、皮肉過程理論と呼ばれている (Wegner, 1994a)。この理論では、思考の抑制は2つの認知過程、すなわち実行過程と監視過程によって行われていると考えられている。実行過程の働きは、抑制対象以外の対象を探すことであり、監視過程の働きは、思考上に抑制対象がないことを確認することである。抑制が行われている間は、監視過程によって、抑制対象が常に参照されることになり、抑制対象のアクセス可能性が高まり続けることになる。そして、実行過程が十分に働いている間は、思考上に抑制対象が浮かばないが、実行過程は認知資源を必要とする過程であるため、認知資源が消耗するのに伴って、この過程は十分に働き続けることができなくなる。実行過程が十分に働かなくなると、監視過程によってアクセス

可能性が高まっていた抑制対象が、抑制前よりも思考上に浮かびやすくなり、その思考に基づいた判断が行われやすくなる。この現象が逆説的效果である。

逆説的效果の低減方略 (代替思考)

逆説的效果の低減方略として、代替思考を利用する方略の効果が検討されている。例えば, Wegner et al. (1987) は、「白くま」について考えることを抑制する際に、代替思考として「赤のフォルクスワーゲン」を考えると、単に抑制するだけの場合よりも、逆説的效果が低減され、「白くま」に関する思考が浮かびにくいことを示した。

しかし、代替思考によっては、逆説的效果を低減できない場合もある。抑制中の侵入思考を扱った木村 (2004b) の実験1では、過去の苛立った出来事に関する思考の抑制を扱い、次の3つの代替思考の効果を検討した。それらは、中性単語 (「白ねずみ」), 抑制対象に関連しその見方に変化を促すようなことわざ (「旅は道づれ世は情け」), 視覚的に利用可能な思考 (「実験が行われた教室の教室番号」) であった。その結果、ことわざと視覚的に利用可能な思考を用いた場合には、単純に抑制を行った場合に比べ、抑制中の侵入思考が少なかった。しかし、中性語を用いた場合と単純に抑制した場合の侵入思考数に差は見られず、中性語は逆説的效果を低減しにくいことが示された。この実験は、どのような代替思考でも逆説的效果を低減できるわけではないことを示している。

代替思考のアクセス可能性

代替思考が逆説的效果を低減できるかどうかは、抑制中の代替思考のアクセス可能性の高さによると考えられる (山本・岡, 2016a)。前節で述べた木村 (2004b) のことわざは、抑制対象に関連するものであるためアクセス可能性の高い代替思考であり、視覚的に利用可能な思考も、常に見ることができるとアクセス可能性の高い代替思考であると考えられる。一方、これらの代替思考に比べ、中性語として用いられた白ねずみは、抑制対象に無関連であり、状況にも無関連であるため、アクセス可能性の低い代替思考であると考えられる。そして、代替思考のアクセス可能性の高さと、抑制対象のアクセス可能性の高まりやすさとの間には、密接な関連があると考えられる。つまり、前述した Wegner の思考抑制のモデルによれば、抑制中に実行過程によって使用される代替思考のアクセス可能性によって、監視過程の働きの強さが異なることになる。アクセス可能性の低い代替思考は、思考上に浮かび続けることが難しいため、常に実行過程が働かなければならず、それと平行して、監視過程も強く働くことになる。その結果、この監視過程の強い働きによって抑制対象のアクセス可能性が高まりやすくなると考えら

れる。一方、アクセス可能性の高い代替思考は、思考上に浮かび続きやすいため、比較的、実行過程および監視過程の働きが弱くてもよいと考えられる。この弱い監視過程の働きによって、抑制対象のアクセス可能性は相対的に高まりにくいと考えられる。

ステレオタイプ抑制における代替思考

ステレオタイプを抑制する場合には、単にアクセス可能性の高い代替思考を使用すればよいというわけではない。これまで、ステレオタイプ抑制における代替思考としては、対象集団に関連する代替思考が扱われてきた(田戸岡・村田, 2010)。なぜなら、ステレオタイプ抑制は対人判断という文脈で行われることが多く、対人判断を行う場合は判断対象について考えなければならないことが多いからである。つまり、ステレオタイプ抑制では、対象集団や対象人物について考えながら、その集団のステレオタイプだけを抑制する必要があるため、ステレオタイプ抑制における代替思考は、対象集団や対象人物に関連することが多くなるのである。実際に、大江・岡・横井(2006)は、ステレオタイプの抑制方略として、対象集団の、抑制対象であるステレオタイプ以外の側面を考えることで、ステレオタイプを使わないようにするといった「接近方略」が用いられることを示している。

対象集団に関連して生成される代替思考の内容

ステレオタイプ抑制の際に、対象集団や対象人物に関連して生成される代替思考が使用されることによる効果を扱った研究がある。まず、ステレオタイプの反対の特性である反ステレオタイプが代替思考として生成されると、逆説的効果が低減されにくいことが示されている。Oe & Oka (2003) の実験 2 は、参加者が女性のステレオタイプを抑制する際に、女性の反ステレオタイプ(例えば、「弱い」という女性ステレオタイプに対して「強い」)が代替思考として生成されると、逆説的効果は低減されないことを示している。

次に、対象集団の抑制対象となるステレオタイプ以外の特性が代替思考として生成されると、逆説的効果が低減されることが示されている。例えば、Oe & Oka (2003) の実験 1 では、参加者が女性のステレオタイプを抑制する際に、女性のステレオタイプ以外の特性が代替思考として生成される場合に、逆説的効果が低減されていた。この実験は、参加者が抑制中に記述した代替思考の内容を分析しており、使用された代替思考が反ステレオタイプのでないときに、逆説的効果が低減されていることを示している。同様に、ステレオタイプ内容モデルに基づいて、代替思考として補償的ステレオタイプを利用した田戸岡・村田(2010)では、参加者が、高齢者の「無能な」というステレオタイプを抑制する際に、代替思考として高齢者の「温

かい」という特性を使用した場合に逆説的効果が低減されていた(実験 2)。このように、対象集団の抑制対象となるステレオタイプ以外の特性が代替思考として生成される場合には、逆説的効果が低減できると考えられる。

以上の議論から、ステレオタイプを抑制する際に代替思考として利用できる、対象集団に関連して生成される特性には、反ステレオタイプの特性と、対象集団の抑制対象となるステレオタイプ以外の特性の 2 種類があると考えられる。後者の特性は、対象集団の中心的で優位なステレオタイプとして抑制対象となる特性とは、異なる特性である。しかし、その多くは、中心的で優位でもないものの、依然としてステレオタイプの特性であることが多い。

優位なステレオタイプの特性は、対象集団に対する当てはまりの程度が強く、対象集団を考える際に、一番に思考上に浮かびやすい、つまり、アクセス可能性が高いと考えられる。一方、非優位なステレオタイプの特性は、相対的に当てはまりの程度が弱く、思考上に浮かびにくい、つまり、アクセス可能性が低いと考えられる。この優位性は、ステレオタイプの特性ごとに決まっていることもあれば、状況によって変化することもある。例えば、ある特定の特性次元が評価されるような場面では、その次元上の特性が優位なステレオタイプの特性になり、対象集団のその他の次元上の特性は、相対的に非優位なステレオタイプの特性となると考えられる。

ステレオタイプを抑制する際は、最初に思考上に浮かぶ優位ステレオタイプの特性が抑制の対象となると考えられる。その際に、対象集団に関連して生成されやすい代替思考は、その次に思考上に浮かびやすい非優位ステレオタイプの特性になると考えられる。

この枠組みに従って、先行研究を整理し直すと、Oe & Oka (2003) の実験 1 では、対象集団のステレオタイプ以外の特性が代替思考として生成された場合に、逆説的効果が低減されており、この代替思考の多くは非優位ステレオタイプの特性に当てはまると考えられる。田戸岡・村田(2010)の実験 2 では、補償的ステレオタイプが代替思考として使用された場合に逆説的効果が低減されている。この実験では、能力次元で評価されるような場面でステレオタイプ抑制を行わせているため、「無能な」というステレオタイプが優位ステレオタイプの特性となり、人柄に関する「温かい」というステレオタイプは、状況的に非優位なステレオタイプの特性になっていたと考えられる。そして、非優位ステレオタイプの特性に分類される代替思考を扱ったこれらの研究では、逆説的効果が低減されていたと考えられる。

代替思考としての反ステレオタイプの特性および非優位ステレオタイプの特性の効果

反ステレオタイプの特性と非優位ステレオタイプの特性とで代替思考としての効果が異なる理由は、両者のアクセス可能性の高さ、つまり、どの程度思考上に浮かびやすいかによって説明できると考えられる。

反ステレオタイプの特性は、対象集団自体の特性ではないため、優位ステレオタイプの特性を抑制する際は、アクセス可能性の低い代替思考であると考えられる。したがって、優位ステレオタイプの特性を抑制する際に、反ステレオタイプの特性が代替思考として使用されると、実行過程が強く働かなければならず、それと並行して監視過程も強く働くことになり、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりやすくなると考えられる。

一方、非優位ステレオタイプの特性は、対象集団自体の特性であるため、優位ステレオタイプの特性を抑制する際は、アクセス可能性の高い代替思考であると考えられる。したがって、非優位ステレオタイプの特性が代替思考として使用されると、反ステレオタイプの特性に比べ、実行過程および監視過程の働きは弱くてもよく、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性は、それほど高まることはないと考えられる。

さらに、非優位ステレオタイプの特性のなかでも、その優位性の程度によって、逆説的效果が低減されやすいものと低減されにくいものがあると考えられる。つまり、非優位ステレオタイプの特性のなかには、対象集団に対する当てはまりの程度が相対的に強い上位の非優位ステレオタイプの特性から、当てはまりの程度が相対的に弱い下位の非優位ステレオタイプの特性までさまざまな特性があると考えられる。上位の非優位ステレオタイプの特性は下位の非優位ステレオタイプの特性よりも、対象集団に対する当てはまりの程度が強く、アクセス可能性が高いと考えられる。そのため、優位ステレオタイプの特性を抑制する際に、上位の非優位ステレオタイプの特性が代替思考として使用されると、思考上に浮かびやすいため、実行過程および監視過程の働きは弱くてもよく、その結果、逆説的效果が低減されやすいと考えられる。一方、下位の非優位ステレオタイプの特性が代替思考として使用されると、それは比較的思考上に浮かびにくいいため、実行過程および監視過程の働きは強く、その結果、逆説的效果は低減されにくいと考えられる。

本研究の目的

本研究では、優位ステレオタイプの特性を抑制する際に、非優位ステレオタイプの特性のなかでも、下位

の非優位ステレオタイプの特性よりも上位の非優位ステレオタイプの特性が代替思考として使用される場合に逆説的效果が低減されやすいという可能性を検討する。具体的には、次の予測を検証する。上位の非優位ステレオタイプの特性が代替思考として使用される場合は、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性は高まりにくいという予測を検証する。一方、単純に抑制する場合と、代替思考として反ステレオタイプの特性や下位の非優位ステレオタイプの特性が使用される場合は、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりやすいという予測を検証する。

具体的な手続きとして、まず、女性ステレオタイプに関する、反ステレオタイプの特性か上位の非優位ステレオタイプの特性か下位の非優位ステレオタイプの特性のいずれかを活性化させて、それぞれのステレオタイプの特性が代替思考として利用されやすい状態となっている3つの条件と、ステレオタイプを活性化させない条件、合わせて4つの条件を作り分ける。次に、優位ステレオタイプの特性を抑制させ、最後に、語彙判断課題によって優位ステレオタイプ関連語と無関連語に対する反応時間を測定する。ここでの反応時間が短いほど、その単語が意味する概念へのアクセス可能性が高いことを表している (Galinsky & Moskowitz, 2000; Galinsky & Moskowitz, 2007; Gordijn et al., 2004; Macrae et al., 1994; Oe & Oka, 2003; Wyer, 2007; 山本・岡, 2016a)。

方 法

予備調査

語彙判断課題における反応時間の測定に使用するための、女性の優位ステレオタイプの特性語（女性ステレオタイプ関連語）と、代替思考として利用される女性の上位の非優位ステレオタイプの特性語、下位の非優位ステレオタイプの特性語および反ステレオタイプの特性語を選定するために予備調査を行った。大学生138名（男性55名、女性78名、不明5名、平均年齢18.35歳、 $SD = 1.38$ ）に対して、女性に関する39語の特性語について、「どの程度女性に当てはまるか」を7件法（1：全く当てはまらない—7：非常によく当てはまる）で尋ねた。39語の特性語は、女性ステレオタイプに関する32語（沼崎・小野・高林・石井, 2006）と、女性性に関する10語（伊藤, 1978）のうち、重複を除いたものであった。欠損値のあった15名を分析から除き、123名のデータを分析に用いた⁵。

⁵ 本研究の予備調査の結果は、山本・岡（2016b）を再分析したものである。

まず、項目ごとの平均値を算出し、その得点を女性ステレオタイプ当てはまり度得点とした。得点が高いほど、女性ステレオタイプに当てはまる程度が強いことを示す。評定された 39 語をクラスタ分析(平方ユークリッド距離, ウォード法)によって 5 つのクラスタに分類した。クラスタごとに、そこに含まれる項目の女性ステレオタイプ当てはまり度得点の平均値を求め、平均値が高いクラスタから順に第 1 クラスタ—第 5 クラスタとした⁶。

それぞれの特性語の選定方法は以下の通りである。優位ステレオタイプの特性語(女性ステレオタイプ関連語)は、第 1 クラスタ($M = 5.31, SD = 1.17$)に含まれる項目のうち、条件によって文字数が大きく異なることを避けるために 5 文字以内の特性語で、得点が高い 3 項目を選定した(「うわさ好き」, 「おしゃべり」, 「依存的」)。上位の非優位ステレオタイプの特性語と下位の非優位ステレオタイプの特性語は、それぞれ第 2 クラスタ($M = 5.10, SD = 1.12$)と第 3 クラスタ($M = 4.65, SD = 1.15$)から選定した。どちらも、それぞれのクラスタで 5 文字以内の得点の高い 3 項目を選定した(「おしゃれ」, 「家庭的」, 「かわいい」と「繊細」, 「控えめ」, 「受け身的」)。なお、これらのクラスタに含まれる特性語の女性ステレオタイプ当てはまり度得点は、すべて 4 点(どちらでもない)以上であったため、女性ステレオタイプとして共有されている特性であると考えられる。

次に、反ステレオタイプの特性語を選定するために、選定された女性ステレオタイプ関連語 3 語それぞれの反対語を調査した。新たに大学生 22 名(男性 11 名, 女性 11 名, 平均年齢 19.64 歳, $SD = 1.19$)に、「うわさ好き」, 「おしゃべり」, 「依存的」のそれぞれの反対語を回答するように求めた。その際に、反対語とは反対の意味をもつ言葉であり、打消し語ではないことを教示した。その結果、それぞれについて最も度数が高かった「無関心」, 「無口」, 「自立的」を反ステレオタイプの特性語とした。

実験計画

活性化(活性化なし, 反ステレオタイプ, 上位非優位ステレオタイプ, 下位非優位ステレオタイプ)を参加者間要因, 単語の種類(女性ステレオタイプ関連語, 女性ステレオタイプ無関連語)を参加者内要因とする 2 要因混合計画であった。従属変数は、語彙判断課題での女性ステレオタイプ関連語に対する反応時間と女

性ステレオタイプ無関連語に対する反応時間の差であった。

参加者

大学生 48 名(男性 19 名, 女性 29 名, 平均年齢 20.67 歳, $SD = 3.17$)が活性化の 4 条件に無作為に割り当てられた。

実験手続き

48 名の参加者は、1 名ずつ実験室での実験に参加した。実験参加同意書に署名した後、以下の 3 つの課題を行った。参加者は、この実験の目的は「対人場面での認知メカニズムを解明すること」であると伝えられた。

語彙判断課題 1 (代替思考として利用される特性の活性化) この課題を用いて、後続の抑制時に代替思考として利用されやすくなる特性を活性化させる操作を行った。参加者はパソコンの画面上に提示される文字列に意味があるかどうかを、キーを押して判断した。条件ごとに、提示される文字列が異なり、予備調査で選定された特性語が提示された。上位非優位ステレオタイプ条件では、「おしゃれ」, 「かていてき」, 「かわいい」が提示され、下位非優位ステレオタイプ条件では、「せんさい」, 「ひかえめ」, 「うけみてき」が提示された。反ステレオタイプ条件では、「むかんしん」, 「むくち」, 「じりつてき」が提示された。活性化なし条件では、人物の特性ではなくジェンダーに関連のない単語が提示された。Blair & Banaji (1996)に基づいて、「えんぴつ」, 「すいみん」, 「たいふう」が提示された。非単語は 3 語であり、意味のない文字列として 4 つの条件の単語に含まれる文字を組み合わせて作られた。具体的には、「つおいか」, 「いてかく」, 「むふわみつ」であった。

語彙判断課題の試行は以下の流れで行われた。注視点が 1,000 ms 提示された後でターゲット刺激の文字列が提示され、参加者のキー入力で文字列が消えるように設定されていた。次にブランクが 1,000 ms あり、その後、次の試行の注視点が提示されるという流れであった。本試行の前に、練習試行が 6 試行行われた。なお、練習で使用された文字列は、女性ステレオタイプとは関連性がなく、本試行では提示されなかった。本試行は、語彙判断課題を用いてステレオタイプを活性化させた Hess, Hinson, & Statham (2004) にならって、30 試行を 1 ブロックとして、3 ブロック行われた。それぞれのブロックでは、15 の単語と 15 の非単語が提示された。それぞれのブロック内では、1 つの文字列が 5 回繰り返し提示された。文字列の提示順序は、参加者ごとに各ブロックで無作為であった。

文完成課題 この課題を用いて、優位ステレオタイ

⁶ 第 1 クラスタから第 3 クラスタまでは、そこに含まれるすべての項目の得点は 4 点(「どちらでもない」)以上であったが、第 4 クラスタと第 5 クラスタは、3 点(「あまり当てはまらない」)の項目が含まれていた。そのため、第 4 クラスタと第 5 クラスタは、ステレオタイプ度が低いと判断し、使用しなかった。

Table 1
条件ごとの各ステレオタイプの特性語得点の平均値と標準偏差

	活性化なし (<i>n</i> = 12)	反ステレオタイプ (<i>n</i> = 12)	上位非優位 ステレオタイプ (<i>n</i> = 11)	下位非優位 ステレオタイプ (<i>n</i> = 12)
上位の非優位 ステレオタイプの特性語	0.42 (0.49)	0.58 (0.64)	1.18 (1.19)	0.17 (0.37)
下位の非優位 ステレオタイプの特性語	0.00 (0.00)	0.42 (0.64)	0.09 (0.29)	1.08 (1.61)
反ステレオタイプの特性語	0.08 (0.28)	0.17 (0.55)	0.09 (0.29)	0.00 (0.00)

注) 括弧内は標準偏差を示す。

ブの特性の抑制の操作を行った。参加者は、「女性は」から始まる文を6つ作成する課題を行った (Oe & Oka, 2003)。その際、人物を形容する言葉を用いること、同じ言葉は繰り返し使用しないこと、1つの文には1つだけ言葉を書くことが教示された。さらに、「『女性はおわさ好き、おしゃべり、依存的』といったイメージがあることが調査されています。しかし、固定概念だけで判断することは社会的によくないと考えられますので、『うわさ好き、おしゃべり、依存的』といったイメージに基づいて書かないように注意してください」という優位ステレオタイプの特性を抑制させる教示が行われた。

語彙判断課題2 (優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性の測定) この課題では、単語の判断に要した時間を測定し、従属変数とした。語彙判断課題1と同様に、参加者はパソコンの画面上に提示される文字列に意味があるかどうかを、キーを押して判断した。提示された文字列は、予備調査によって選定された女性ステレオタイプ関連語 (優位ステレオタイプの特性語) 3語 (「うわさずき」、「おしゃべり」、「いぞんてき」と、女性ステレオタイプ無関連語 3語 (「きゅうくつ」、「しおからい」、「ほろにがい」)、非単語 6語 (「いうついお」、「いわくしら」、「ぞがさやう」、「かんにゆず」、「べおてろき」、「きりしほき」) であった。非単語は、意味のない文字列として、女性ステレオタイプ関連語と女性ステレオタイプ無関連語に含まれる文字を組み合わせて作られた。

1 試行の流れは、語彙判断課題1と同様であり、練習試行も同様の内容で行われた。本試行は、4ブロックで構成され、1ブロックは12試行であり、そのうち6試行は単語であり、6試行は非単語であった。それぞれのブロック内では、同じ文字列が繰り返し提示されることはなかった。文字列の提示順序は、参加者ごとに各ブロックで無作為であった。

すべての課題が終わった後、デブリーフィングが行われた。

結 果

分析対象者

課題間の関係性を指摘した1名のデータを以下の分析から除外し、47名のデータを分析に用いた。除外した後の条件ごとの人数は、活性化なし条件12名 (男性6名、女性6名)、反ステレオタイプ条件12名 (男性4名、女性8名)、上位非優位ステレオタイプ条件11名 (男性6名、女性5名)、下位非優位ステレオタイプ条件12名 (男性3名、女性9名) であった。

活性化の操作チェック

活性化の操作の有効性を確認するために、文完成課題で参加者が作成した文の内容を分析した。まず、参加者ごとに、語彙判断課題1で使用された単語 (上位の非優位ステレオタイプの特性語、下位の非優位ステレオタイプの特性語、反ステレオタイプの特性語) がそれぞれいくつ記述されていたかを算出し (範囲は0から6)、それぞれの特性語得点とした。語彙判断課題1で使用された言葉と意味は同じであると考えられるが完全に一致しない言葉が4つの条件を合わせて17個あったが (例えば、「かわいい」と「かわいらしい」)、これについては、研究目的を知らない2名に、どの程度同じ意味をもつかを7件法 (1: 全く当てはまらない—7: 非常に当てはまる) で評定を求めた。2名の評定値の平均を算出した結果 ($r = .27$)、高い値が得られたため ($M = 5.03, SD = 0.96$)、それらの言葉を含めた。それぞれの特性語得点について、条件ごとに差があるかどうかを検討するために分散分析を行った (Table 1)。

まず、上位の非優位ステレオタイプの特性語得点に関して1要因の分散分析を行った結果、主効果が有意であった ($F(3, 43) = 3.62, p < .05, \eta_p^2 = .20$)。ライアン法による多重比較 (以下での多重比較はすべてライアン法による) を行った結果、上位非優位ステレオタイプ条件は活性化なし条件に比べ、得点が高い傾向がみられた ($p < .10, d = 0.85$)。また、下位非優位ステ

Table 2
各単語に対する活性化条件ごとの対数変換後の平均反応時間と標準偏差

	活性化なし (<i>n</i> = 12)		反ステレオタイプ (<i>n</i> = 12)		上位非優位 ステレオタイプ (<i>n</i> = 11)		下位非優位 ステレオタイプ (<i>n</i> = 12)	
	関連語	無関連語	関連語	無関連語	関連語	無関連語	関連語	無関連語
平均値	6.29 (552)	6.40 (607)	6.34 (576)	6.40 (606)	6.52 (699)	6.48 (656)	6.35 (579)	6.38 (594)
標準偏差	0.20 (111)	0.16 (99)	0.15 (85)	0.13 (78)	0.22 (180)	0.14 (90)	0.14 (80)	0.15 (96)

注) 括弧内は対数変換前の反応時間 (ms) を示す。

レオタイプ条件に比べ、得点が高いことが示された ($p < .05, d = 1.17$)。

次に、下位の非優位ステレオタイプの特性語得点に関して 1 要因の分散分析を行った結果、主効果が有意であった ($F(3, 43) = 3.35, p < .05, \eta_p^2 = .19$)。多重比較を行った結果、下位非優位ステレオタイプ条件は、活性化なし条件に比べ、得点が高いことが示された ($p < .05, d = 0.95$)。また、上位非優位ステレオタイプ条件に比べ、得点が高い傾向がみられた ($p < .10, d = 0.84$)。

最後に、反ステレオタイプの特性語得点に関して 1 要因の分散分析を行った結果、有意な効果はみられなかった ($F(3, 43) = 0.44, ns, \eta_p^2 = .03$)。

以上の結果から、上位非優位ステレオタイプ条件と下位非優位ステレオタイプ条件では、操作は有効であったと考えられるが、反ステレオタイプ条件では、操作の有効性は確認できなかった。

活性化条件ごとの語彙判断課題 2 における反応時間

語彙判断課題 2 における女性ステレオタイプ関連語 3 語 (「うわさ好き」, 「おしゃべり」, 「依存的」) と無関連語 3 語に対する反応時間について分析を行った。それぞれの単語は、語彙判断課題 2 において 4 回提示されているため、参加者 1 名につき 24 試行での反応時間が分析対象となった。これらの試行での誤答率は 3.46% であり、誤答の場合の反応時間を除いて分析を行った。まず、データの分布を正規分布に近似させるために、すべての反応時間を対数変換した。参加者ごとに、単語ごとの平均値を算出し、以下の分析で用いた。

女性ステレオタイプ関連語 3 語および無関連語 3 語に対する反応時間の平均値を従属変数として、活性化 (活性化なし, 反ステレオタイプ, 上位非優位ステレオタイプ, 下位非優位ステレオタイプ) × 単語の種類 (女性ステレオタイプ関連語, 女性ステレオタイプ無関連語) の 2 要因の分散分析を行った。その結果、2 要因の交互作用効果が、予測通りの有意な傾向であっ

たが、有意水準には達しなかった ($F(3, 43) = 2.42, p < .10, \eta_p^2 = .14$)⁷。そこで、女性ステレオタイプ関連語 3 語の関係を検討したところ、2 つに分かれると考えられた。予備調査でのクラスタ分析の結果では、「うわさ好き」と「おしゃべり」は最初にクラスタとして結合しており、最も類似性の高い 2 語である。「依存的」は、このクラスタに次に結合しており、類似度が低かった。この予備調査の結果から「うわさ好き」と「おしゃべり」は、女性の優位ステレオタイプの中で中心的な特性語であると考えられる。

したがって、「うわさ好き」と「おしゃべり」の 2 語の平均値を算出し、同様の分散分析を行った (Table 2)。その結果、活性化の主効果が有意傾向であり ($F(3, 43) = 2.25, p < .10, \eta_p^2 = .14$)、単語の種類的主効果が有意であり ($F(1, 43) = 4.60, p < .05, \eta_p^2 = .10$)、2 要因の交互作用効果は有意な水準に達した ($F(3, 43) = 4.05, p < .05, \eta_p^2 = .22$)⁸。

活性化の主効果が有意傾向であったので、ライアン法による多重比較を行ったが、活性化間で有意な差は得られなかった。一方、有意な単語の種類の主効果は、女性ステレオタイプ無関連語に比べて関連語は反応時間が短いことを示していた。

⁷ 「うわさ好き」, 「おしゃべり」, 「依存的」の 3 つの特性語および無関連語 3 語に対する反応時間の平均値について分散分析を行ったところ、活性化 × 単語の種類 の 2 要因の交互作用効果が有意傾向であったことから、単純主効果の検定を行った。その結果、活性化なし条件では単語の種類的主効果が有意であり、活性化なし条件では、女性ステレオタイプ関連語に対する反応時間は (575 ms)、女性ステレオタイプ無関連語 (607 ms) に比べ短かった ($F(1, 43) = 4.99, p < .05, \eta_p^2 = .10$)。

⁸ 女性ステレオタイプが題材であるため、性別の影響を検討した。具体的には、参加者の性別の要因を加えた、活性化 × 単語の種類 × 性別 の 3 要因の分散分析を行ったが、性別の要因に関わる効果は有意ではなかった (性別の主効果: $F(1, 39) = 0.38, p = .54, \eta_p^2 = .01$, 性別と活性化の交互作用効果: $F(3, 39) = 0.36, p = .78, \eta_p^2 = .03$, 性別と単語の種類の交互作用効果: $F(1, 39) = 0.55, p = .46, \eta_p^2 = .01$, 3 要因の交互作用効果: $F(3, 43) = 0.81, p = .50, \eta_p^2 = .06$)。

以上の効果は、2要因の交互作用効果が有意なことによって制限されていた。単純主効果の検定を行った結果、活性化なし条件では単語の種類の主効果が有意であり、女性ステレオタイプ関連語に対する反応時間は無関連語に比べて短かった ($F(1, 43) = 10.92, p < .01, \eta_p^2 = .20$)。さらに、反ステレオタイプ条件では単語の種類の主効果が有意傾向であり、女性ステレオタイプ関連語に対する反応時間は無関連語に比べて短かった ($F(1, 43) = 3.04, p < .10, \eta_p^2 = .07$)。なお、上位非優位ステレオタイプ条件と、下位非優位ステレオタイプ条件では、女性ステレオタイプ関連語と無関連語に対する反応時間に差はみられなかった ($F(1, 43) = 2.24, ns, \eta_p^2 = .05$; $F(1, 43) = 0.54, ns, \eta_p^2 = .01$)。さらに、女性ステレオタイプ関連語において、活性化の主効果が有意であった ($F(3, 86) = 4.03, p < .01, \eta_p^2 = .12$)。多重比較を行った結果、女性ステレオタイプ関連語について、上位非優位ステレオタイプ条件は、他の3つの条件に比べ、反応時間が長かった (活性化なし条件: $p < .05, d = 1.09$; 反ステレオタイプ条件: $p < .10, d = 0.95$; 下位非優位ステレオタイプ条件: $p < .10, d = 0.94$)。なお、女性ステレオタイプ無関連語条件では、活性化の主効果は有意ではなかった ($F(3, 86) = 0.82, ns, \eta_p^2 = .03$)。

考 察

本研究は、優位ステレオタイプの特性の抑制を行う際に、上位の非優位ステレオタイプの特性が代替思考として使用されると、優位ステレオタイプの特性のアクセス可能性が低い、反ステレオタイプの特性および下位の非優位ステレオタイプの特性が代替思考として使用されると、それが高くなるという可能性を検討した。

実験操作の有効性

操作チェックの結果から、上位非優位ステレオタイプ条件においては、上位の非優位ステレオタイプの特性語が代替思考として使用されており、また、下位非優位ステレオタイプ条件においては、下位の非優位ステレオタイプの特性語が代替思考として使用されていた。しかし、反ステレオタイプの特性語については、条件間で差はみられなかった。以下では、反ステレオタイプ条件を除いて、上位非優位ステレオタイプ条件と下位非優位ステレオタイプ条件について議論を行う。

非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性

仮説を検証するために分散分析を行った結果、活性化なし条件では、語彙判断課題における女性ステレオタイプ関連語に対する反応時間が無関連語に対するそれよりも短かった。このことは、Macrae et al. (1994)

など多くの先行研究と一致しており、単純に抑制することによってステレオタイプ関連語のアクセス可能性が高まり、逆説的效果が生じたことを示している。一方、上位非優位ステレオタイプ条件と下位非優位ステレオタイプ条件では、ステレオタイプ関連語と無関連語に対する反応時間に有意な差はみられなかった。このことは、上位・下位の非優位ステレオタイプの特性が代替思考として使用されると、ステレオタイプ関連語のアクセス可能性は低く、逆説的效果が生じていなかったことを示している。この結果は、本研究の予測通り、非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性を支持していると考えられる。

以上の結果は、先行研究で得られた知見と整合している。Oe & Oka (2003) の実験1では、女性のステレオタイプを抑制する際に、女性のステレオタイプ以外の特性が代替思考として生成されるときに逆説的效果が低減されていた。同様に、田戸岡・村田 (2010) では、高齢者に対する「無能な」というステレオタイプを抑制する際に、代替思考として高齢者の「温かい」という特性を使用したときに逆説的效果が低減されていた (実験2)。これらの代替思考は、序論で論じたように、非優位ステレオタイプの特性に含まれると考えられる。

本研究には以下の意義があると考えられる。第一に、田戸岡・村田 (2010) が示唆しているように、現実場面では、ステレオタイプ抑制は対人判断の文脈で行われることが多く、その際に対象集団に無関連なものを代替思考とすればよいというわけではない。本研究では、対象集団に関連する代替思考である非優位ステレオタイプの特性の効果を検討し、逆説的效果が低減されやすいことを示した。このように、対人判断の文脈で用いられやすい有効な代替思考を示した点で意義があると考えられる。

第二に、前述した2つの先行研究では、明示的な指示が行われていたり、代替思考の内容自体が明示的に指示されていたりした。これらの研究では、代替思考は非自発的に生成されていたと考えられる。一方、本研究では、プライミングによって代替思考の内容を活性化させる試みを行った。現実の対人判断の場面では、ある集団の特定の事例に接触することで、その内容がプライミングされ、代替思考となる可能性も考えられる。対人判断の文脈の中で活性化される特性が自発的に代替思考として使用される状況を扱い、その自発的な代替思考が逆説的效果の低減に効果的であることを示した点で意義があると考えられる。

非優位ステレオタイプの特性の上位と下位の差

本研究の結果からは、上位非優位ステレオタイプ条件と、下位非優位ステレオタイプ条件との間には、予測したような逆説的效果の差はみられなかった。この

ような結果が得られた理由として、活性化の操作の問題が考えられる。つまり、序論で述べたように下位の非優位ステレオタイプの特性は、上位の非優位ステレオタイプの特性に比べ、アクセス可能性が低いと考えられるが、語彙判断課題によって、下位非優位ステレオタイプ条件では下位の非優位ステレオタイプの特性が活性化され、上位非優位ステレオタイプ条件では上位の非優位ステレオタイプの特性が活性化されたため、両条件ともに活性化された特性のアクセス可能性が同程度に高まり、両者の違いを検出できなかった可能性が高い。実際に、Table 1 に示した操作チェックの通り、上位非優位ステレオタイプ条件の上位の非優位ステレオタイプの特性語得点と、下位非優位ステレオタイプ条件の下位の非優位ステレオタイプの特性語得点に差はほとんどみられていない（前者は 1.18、後者は 1.08）。

ただし、この両者の差の有無について、分散分析の下位検定のもう 1 つの方向の結果が示唆的である。ステレオタイプ関連語について、条件間の比較を行うという方法である（Galinsky & Moskowitz, 2000; Gordijn et al., 2004; Macrae et al., 1994; Oe & Oka, 2003）。これらの比較は、抑制を行わない統制条件を設けて、それとの比較で逆説的效果を検討するものである。本研究では、統制条件を設けていないが、探索的に女性ステレオタイプ関連語について活性化条件間でライアン法による多重比較を行った。その結果、女性ステレオタイプ関連語において、上位非優位ステレオタイプ条件は、他の 3 つの条件に比べ、反応時間が長かった。この結果は、本研究の予測通り、上位の非優位ステレオタイプの特性の方が、下位の非優位ステレオタイプの特性よりも、逆説的效果の低減に有効である可能性を示唆している。しかし、上位非優位ステレオタイプ条件は、無関連語に対する反応時間も他の 3 つの条件のそれらよりも長くなっていた。この差は有意ではなかったものの、関連語についての有意な差を制限するものである可能性は否定できない。

本研究の限界点

最後に本研究の限界点を 3 つ述べる。第一に、操作チェックの結果から反ステレオタイプ条件では、操作の有効性が確認されなかった。本研究では、語彙判断課題によって特性を活性化させて代替思考として使用されやすい状態にするという操作方法を用いていた。しかし、序論で述べたように、反ステレオタイプの特性は対象集団自体の特性ではないことから、アクセス可能性が特に低いと考えられるため、語彙判断課題によっても十分にアクセス可能性が高まらなかった可能性があり、また、アクセス可能性が高まっていたとしても、代替思考として利用されなかった可能性もある。アクセス可能性が高まっていたとしても代替思考とし

て利用されなかった理由として、本研究で用いた抑制課題の問題が考えられる。なぜなら、抑制課題では「女性性」から始まる文の作成を求めたため、反ステレオタイプの特性は、例えばプライミングによってアクセス可能性が高まっていたとしても、その対象集団自体の特性ではないので、記述には利用されにくかった可能性が考えられる。対人判断の文脈の中での反ステレオタイプの特性の役割や機能について、今後の検討が必要である。

第二に、本研究の実験デザインについて述べる。抑制後の逆説的效果を扱った研究では、抑制を行わない統制条件との比較を行うことが多いが、本研究では抑制を行わない統制条件を設けていなかった。本研究ではこのような統制条件との比較を行っていないため、実際に逆説的效果が生じていたかどうかは明確ではないが、多くの研究でステレオタイプの抑制後に逆説的效果が生じることが示されていることから（Macrae et al., 1994; Monteith et al., 1998; Oe & Oka, 2003; 田戸岡・村田, 2010）、ステレオタイプ抑制を行うと逆説的效果が生じることを前提として、ステレオタイプ関連語と無関連語のアクセス可能性の差を逆説的效果の指標とする実験を行った。しかし、本研究は、先行研究とは刺激や手続きが同じであるとはいえないため、統制条件を設けて逆説的效果を直接的に検出することが今後の課題である。

第三に、代替思考として非優位ステレオタイプの特性が使用されることの弊害が挙げられる。本研究の結果から、優位ステレオタイプの特性を抑制する際に、非優位ステレオタイプの特性が代替思考として使用されると、その後の優位ステレオタイプの特性の使用が抑えられると考えられるが、代替思考として使用された活性化された非優位ステレオタイプの特性に基づいたステレオタイプの判断が行われてしまう可能性がある。ここで行われる判断がステレオタイプの判断かどうかは、今後の実証的検討を待たなければならないが、ステレオタイプの判断になりにくい可能性もある。例えば、ある対象について連合している概念が多いほど、検索する際に 1 つの概念に対する反応時間が長くなることが示されていることから（Anderson, 1974）、非優位ステレオタイプの特性が代替思考として使用され、対象集団との連合を強くすることによって、対象集団を判断する際にどれか 1 つのステレオタイプの特性が用いられやすいということがなくなる可能性がある。1 つのステレオタイプによる判断に偏らなくなるということは、対象集団に対してさまざまな特性を用いて判断することになるため、ステレオタイプの低減につながる可能性が考えられる。

引用文献

- Anderson, J. R. (1974). Retrieval of propositional information from long-term memory. *Cognitive Psychology*, 6, 451–474.
- Blair, I. V., & Banaji, M. T. (1996). Automatic and controlled processes in stereotype priming. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1142–1163.
- Clark, D. M., Ball, S., & Pape, D. (1991). An experimental investigation of thought suppression. *Behavior Research and Therapy*, 29, 253–257.
- Davies, M. I., & Clark, D. M. (1998). Thought suppression produces rebound effect with analogue post-traumatic intrusions. *Behaviour Research and Therapy*, 36, 571–582.
- Förster, J., & Liberman, N. (2001). The role of attribution of motivation in producing postsuppression rebound. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 377–390.
- Galinsky, A. D., & Moskowitz, G. B. (2000). Perspective-taking: Decreasing stereotype expression, stereotype accessibility, and ingroup favoritism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 708–724.
- Galinsky, A. D., & Moskowitz, G. B. (2007). Further ironies of suppression: Stereotype and counterstereotype accessibility. *Journal of Experimental Social Psychology*, 43, 833–841.
- Gordijn, E. H., Hindriks, I., Koomen, W., Dijksterhuis, A., & Van Knippenberg, A. V. (2004). Consequences of stereotype suppression and internal suppression motivation: A self-regulation approach. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 212–224.
- Harvey, A. G., & Bryant, R. A. (1998). The effect of attempted thought suppression in acute stress disorder. *Behavior Research and Therapy*, 36, 583–590.
- Hess, T. M., Hinson, J. T., & Statham, J. A. (2004). Explicit and implicit stereotype activation effects on memory: Do age and awareness moderate the impact of priming? *Psychology and Aging*, 19, 495–505.
- 伊藤 裕子 (1978). 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1–11.
- 木村 晴 (2004a). 未完成な思考の抑制とその影響 教育心理学研究, 52, 44–51.
- 木村 晴 (2004b). 望まない思考の抑制と代替思考の効果 教育心理学研究, 52, 115–126.
- 木村 晴 (2005). 抑制スタイルが抑制の逆説的効果の生起に及ぼす影響 教育心理学研究, 53, 230–240.
- Liberman, N., & Förster, J. (2000). Expression after suppression: A motivational explanation of postsuppression rebound. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 190–203.
- Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Milne, A. B., & Jetten, J. (1994). Out of mind but back in sight: Stereotypes on the rebound. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 808–817.
- Monteith, M. J., Sherman, J. W., & Devine, P. G. (1998). Suppression as a stereotype control strategy. *Personality and Social Psychology Review*, 2, 63–82.
- Muraven, M., Tice, D. M., & Baumeister, R. F. (1998). Self-control as limited resource: Regulatory depletion patterns. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 774–789.
- Newman, L. S., Duff, K. J., Hedberg, D. A., & Blistein, J. (1996). Rebound effects in impression formation: Assimilation and contrast effects following thought suppression. *Journal of Experimental Social Psychology*, 32, 460–483.
- 沼崎 誠・小野 滋・高林 久美子・石井 国雄 (2006). Sequential Priming によるジェンダー・ステレオタイプの活性化の研究 首都大学東京・東京都立大学 人文学報, 369, 21–52.
- Oe, T., & Oka, T. (2003). Overcoming the ironic rebound: Effective and ineffective strategies for stereotype suppression. In K. S. Yang, K. K. Hwang, P. B. Pedersen, & I. Daibo (Eds.), *Progress in Asian social psychology: Conceptual and empirical contributions* (pp. 233–246). Westport, CT: Praeger.
- 大江 朋子・岡 隆・横井 俊 (2006). ステレオタイプ抑制の動機と方略——その分類と関係—— 社会心理学研究, 22, 33–47.
- 田戸岡 好香・村田 光二 (2010). ネガティブなステレオタイプの抑制におけるリバウンド効果の低減方略——代替思考の内容に注目して—— 社会心理学研究, 26, 46–56.
- Wegner, D. M. (1994a). Ironic processes of mental control. *Psychological Review*, 101, 34–52.
- Wegner, D. M. (1994b). *White bears and other unwanted thoughts: Suppression, obsession, and the psychology of mental control*. New York: Guilford Press.
- Wegner, D. M., & Erber, R. (1992). The hyperaccessibility of suppressed thoughts. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 903–912.
- Wegner, D. M., Schneider, D. J., Carter, S. R., & White, T. L. (1987). Paradoxical effects of thought suppression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 5–13.
- Wyer, N. A. (2007). Motivational influences on compliance with and consequences of instructions to suppress stereotypes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 43, 417–424.
- 山本 真菜・岡 隆 (2016a). ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差——認知的複雑性との関係—— 社会心理学研究, 31, 149–159.
- 山本 真菜・岡 隆 (2016b). 優位性に基づく女性ステレオタイプの分類 日本大学心理学研究, 37, 50–57.